

研究課題：欠損補綴患者の地域連携禁煙クリティカルパスの標準化に関する行動科学的調査研究  
 研究者名：埴岡 隆<sup>1)</sup>、晴佐久悟<sup>1)</sup>、小島美樹<sup>2)</sup>  
 所属：<sup>1)</sup>福岡歯科大学歯学部口腔保健学講座、<sup>2)</sup>大阪大学大学院歯学研究科予防歯科学教室

喫煙と歯周病との因果関係が解明され、最近、喫煙が歯周病の治療効果にも悪影響を及ぼすことも明らかになってきた。したがって、喫煙を続けると歯の周囲組織の破壊がすすみ、歯の支持組織の減少の結果、喫煙者は多くの歯を失い QOL の低下をすすめると考えられる。早くからたばこ消費がすすんだ欧米諸国では喫煙と歯の喪失に関する疫学調査結果が報告されており、わが国でも報告が相次いでいる。一般に、歯の喪失は一度に起こることは少なく、1本歯を失う度に補綴物の修理や再製が繰り返され、喫煙者では非喫煙者よりも欠損補綴の機会が多くなることが示唆される。喫煙と歯の喪失の因果関係が確実であれば、歯を失った喫煙者に良質な歯科医療を提供するために、欠損補綴処置を受ける喫煙者への禁煙指導と禁煙を希望する者への禁煙支援は、生活習慣病や口腔疾患の予防の観点だけでなく、歯科医療の面からも非常に重要であると考えられる。そこで、まず、欧米諸国の疫学研究の知見とわが国の知見を併せて世界的に喫煙と歯の喪失の因果関係がどの程度確立されるかを検証する必要がある。

歯科患者への禁煙指導・禁煙支援が効果的であることが示されている一方で、歯科患者の禁煙達成・維持の効率の観点から、医師による禁煙治療や市販禁煙補助薬の利用は、自力での禁煙より効果的であることが立証されていることから、地域連携の禁煙経路の利用を歯科患者に勧めることも選択肢となってきた。そこで、本研究では、さらなる歯の喪失防止の観点から地域連携禁煙クリティカルパスの普及を図るために、欠損補綴歯を有する歯科受診患者を対象として、禁煙指導・禁煙支援に係る知識・意識・行動を調査し、その結果をクライアントである歯科患者の観点から、地域連携禁煙クリティカルパスの標準化に反映することを目的とした。

喫煙と歯の喪失の関係を報告した疫学研究的文献の検索を行い、横断研究10編と前向きコホート研究5編、合計15編（日本7編、米国5編、オーストラリア、ドイツ、イタリア各1編）のうち、質の高い研究方法を用いた研究として横断研究6編、コホート研究2編、合計8編（日本2編、米国4編、イタリア、ドイツ各1編）が選択された（図）。これらの研究結果を既存の手法により統合・解釈した結果、「喫煙と歯の喪失の関係の大きさは中程度であり、その因果関係を推定する確実な科学的根拠が存在する」と結論された。欠損補綴歯を有する患者に、さらなる歯の喪失を防止し補綴物の維持管理効果を高めるために、禁煙指導・禁煙支援が重要な歯科医療の要素であることが示唆される。

欠損補綴歯を有する患者を対象にして、禁煙指導・禁煙支援に係る知識・意識・行動を調査したところ、歯科医師が喫煙・禁煙に係る説明をするのは当然であると感じており、禁煙の準備度の検査は質問紙等を用いて行うことが受容性が高く、口腔の健康および歯科治療への影響に加えて禁煙方法の説明が禁煙動機を高める受容性の高い会話内容であることが示唆された。禁煙支援については、医科禁煙外来の紹介に次いで、市販の禁煙補助薬の説明に加えて行動科学によるカウンセリングを行うことの重要性が示唆された。

本研究では禁煙外来の紹介やカウンセリングおよび市販禁煙補助薬の購入等の様々な経路を要素とする地域連携禁煙クリティカルパスを標準化し適用することについての歯科患者の高い受容性が示された。今後、歯科医師の知識・意識・行動を調査し、その結果から利便性の高い地域連携禁煙クリティカルパスを構築するとともに、効果的な教育研修方法の適用により、歯科医院における禁煙指導・禁煙支援の普及が図られると思われる。

図 喫煙・禁煙と歯の喪失との関係の大きさ(疫学研究15論文のうち質の高い研究8編)

